

ステークホルダーダイアログ

外部有識者との対話を経営に活かす

グローバル経営を変革させる起点としてのSDGs

富士通グループでは、様々なステークホルダーの意見を経営に活かすため、外部有識者と社内幹部によるダイアログを開催しています。社会や投資家が企業を評価する軸が、より中長期視点での経営やESGへの取り組みへと変わっている中、SDGsを起点として企業がイノベーションを起こし自らを変革していくためには何が重要か、そして、それを企業の持続的な成長にどう結び付けるかについて、活発な議論が交わされました。



有識者 富士通
 宋 修永様 西口 尚宏様 森澤 充世様 田中 達也 佐々木 伸彦 山田 巖英

ダイアログを終えて

有識者



一般社団法人 Japan Innovation Network (JIN) 専務理事
 国連開発計画 (UNDP)
 イノベーション担当上級顧問
西口 尚宏様

実行力に構想力を加えて、世界のありたい姿=SDGsを達成するイノベーションを

かつて属人的能力だと思われていたイノベーションは、今や組織的に行えるようになり競争力の源泉となった。しかし、「新たな価値」を生み出すには、日本企業が得意な実行力に加えて何をすべきかを「構想」する力が求められ、自由な「構想」から課題を発見することが事業創造のポイントとなる。

また、イノベーションの本質は現状から作りたい未来の姿にシフトすることであり、世界は2030年に達成したい姿であるSDGsへのシフトを目指している。SDGsの169ターゲットや232指標に書かれている「何をすべきか」に、無限の可能性を持つICTを掛け合わせることで、富士通がグローバルに新たな価値を提供していくことを期待する。



PRI事務局
 ジャパンヘッド
森澤 充世様

SDGsがもたらす世界やビジネスモデルの変化を理解し機会を活かす人材の確保を

企業の非財務情報といわれる「ESG (環境・社会・ガバナンス)」は、企業の将来における付加価値の源泉を示すという点で「将来財務情報」ともいえる。そのため、投資の世界ではESGを考慮した長期視点の企業評価を実施しており、企業も取り組みおよび情報開示を工夫する必要がある。富士通のような企業で、ソーシャル (社会) 面で特に重要なのは人材といえる。SDGsによって世界やビジネスモデルが変化することを理解し価値を創造していく人材の必要性が高まっている。経営者が目指すSDGs戦略を浸透させ実行できる人材確保について、評価制度、教育制度の拡充、社員の帰属意識向上等を考察する必要がある。



デロイトトーマツ コンサルティング
 合同会社
 代表執行役社長
宋 修永様

課題解決の先にある価値の提供こそ、企業と社会の持続可能な発展のカギ

SDGsのようなグローバルな社会課題に取り組むことは企業の持続可能性にとっても重要な要素である。そのため、様々なステークホルダーと課題解決のためのエコシステムを構築するなど、経営の軸の1つとして10年前から社会アジェンダに取り組んでいる。さらにそれをDNA化しようと「100年先に続くバリューを、日本から」というスローガンも打ち出した。

多様なステークホルダーと関わり合う複雑性や不確実性はあるが、従業員教育や評価項目への組み込み、若手を中心としたSDGs / 社会課題関連テーマの探求などを通じて、社会課題への取り組みを組織文化として定着させ、クライアントと共に新しい価値を社会に提供していくことが肝要だ。

富士通



代表取締役社長
田中 達也

SDGsを起点に、富士通が社会に提供する価値・本質を考え抜いていく

富士通は「テクノロジーで人を幸せにする」ことを念頭に持続可能な社会の実現を目指しており、そのビジネスの方向性はSDGsと一致している。しかし、SDGsがビジネスによる実行段階に移行している今、当社もイノベーションを通じた貢献を実例として示していく必要がある。

そのためには、現状維持や前例踏襲から脱却し、今までと違った画期的なやり方で社会に価値を提供していかなければならない。富士通が社会に提供すべき価値や本質は何なのかを構想段階でしっかり考えるよう指示しているが、実行段階では目先のことに流されてコンサパティブになってしまうこともあるため、常に構想に立ち返る必要性を再認識した。

グローバルサービスカンパニーとして成長を目指すうえで、世界を視野に入れた技術開発と地域別のきめ細かなサービス、短期的利益と中長期の展望、経営陣と若手・中堅の視点といったバランスも重要になる。SDGs達成に向けて富士通がより大きな価値を生み出し続けるために、より広い視野で構想を行う重要性をトップメッセージとして発信し続けていきたい。



執行役員副会長
 (政策渉外、環境・CSR本部担当)
佐々木 伸彦

SDGsをイノベーションのヒントにして、グローバルで取り組みを加速する

SDGsは会社の目標の延長線上にあり、富士通の事業はある意味すべてSDGsにつながっているといえる。しかし、ただそれを言っているだけでは単なる自己満足、自己正当化に終わってしまうため、利益を追求する企業の本分とSDGs貢献の両立、つまりビジネスの中核にどのようにSDGsを重ね合わせて、よりスケールの大きい課題に取り組んでいくかが重要だと考えている。

従来、日本企業は中長期的な観点から、サステナビリティを考慮して企業運営を行ってきたと認識しており、会社も法人という人として、立派でありたいという気持ちを持っている。そのため、社員には自分の仕事はSDGsの何番に当たるという紐づけのみに終始せず、SDGsを意識することで、新しいビジネスチャンスやイノベーションへのヒントを見つけるように促している。また、自社が普遍的価値のために事業を行っており自分が何らかの形でそこに寄り添っているというのは社員の喜びにもつながることなので、若い人や海外を含めて、富士通グループ丸となって世界の共通言語であるSDGsへの取り組みを加速していきたい。



執行役員
 (グローバルコーポレート部門
 グローバルマーケティング
 グループ長)
山田 巖英

SDGsを活用して、お客様のその先へのビジネスインパクトを生み出す

2018年の富士通のテーマはDigital Co-creation for Successであり、皆様と共にデジタル革新に取り組むことでビジネスの継続性を向上させることがSDGsの貢献につながると考えている。また、企業メッセージとしてもSDGsは重要なテーマで、ホワイトペーパーのFT&SVや富士通フォーラムという展示会で取り上げている。

SDGsは「誰も取り残さない」というのがキーワードであり、これは富士通が掲げる「ヒューマンセントリック」の考え方も通じる。ICTによるイノベーションを「人」に着目して活用し、世界の問題解決に取り組むことは富士通のビジネスの成長にとっても重要だが、それには、お客様の先にある課題への深い理解が必要となる。富士通はこれまで個社対応が中心だったため、どのようにお客様のその先に対してビジネスインパクトを実現していくかは重要なテーマであり、デザイン思考を活用してこの課題に取り組もうとしている。さらに、今期からは中長期提案のテーマにSDGsを盛り込むよう設定した。SDGsという国際目標を意識することを浸透させつつ、世界中から事業提案を収集し、実行に結び付けていきたい。

今回のダイアログを通じて、世界共通のありたい姿であるSDGsを起点に、その実現を可能にするイノベーションを起こすことが投資家や社会の期待であり、新たな成長の機会となることで改めて認識できました。また、そのためには富士通が提供できる価値を改めて検討し、社員が1つ

の方向を向くよう社内を改革していくことの重要性もご指摘いただきました。頂戴したご意見を基に、ICTを活用したスケールのある貢献の実現に向けてより本質的な変革に挑んでいきます。